

フィンランドでみた地方選挙文化

鹿谷 雄一

フィンランド地方選挙が2025年4月13日に実施された。市町村議会議員選挙（4年任期）と2023年に新設された社会福祉と救急を担う広域のアルエ議会議員選挙（今後は4年任期）とが今回初めて同日に行われた。この統一地方選挙にあわせて、内陸部最大の都市タンペレ市（人口約25万）とその近郊を中心に訪問してきた。

地方自治法により人口に応じた議員定数が定められている。非拘束名簿式比例代表制を採用し、投票用紙に番号を記入する方式となっている。

選挙ポスターの掲示板は、どちらの選挙にも政党に1枠付与され、立候補者には番号（市町村は2番から、アルエは2002番から各政党で連続）が割り振られる。停留所やごみ箱、新聞、タウン誌などの広告スペースには、政党を問わず立候補者個人の顔写真が並ぶ。立候補者のひとりをラッピングしたLRTも走行していた。なかには2種の番号を表示する立候補者もいる。市町村とアルエ両方に立候補している「重複」立候補者である。

市庁舎前の広場には、各政党の選挙小屋（テント）が立ち並ぶ。ここを拠点として立候補者や支援者がビラを配布し、住民は各政党が用意しているコーヒーやパン、菓子などを口にしながらか説明を聞いたり質問をしたり

している。なかには長い列をなすテントがある。先頭をみるとグリルしたソーセージを受け取っている。選挙の風物詩らしい。選挙権のない18歳未満と思われる者もみかける。本来の目的ではない一面もあるのかもしれないが、政党や立候補者と直接対話することができる選挙小屋の意義は大きいと感じた。

広場以外にも人々が集まる場所にテントを設置する政党やビラを配布する立候補者もみかける。投票日前日、目抜き通りで若い男女2人がビラを配布していた。声をかけると、市議選のみに立候補する政治学を学ぶ20歳男性（新人）と行政学を学ぶ26歳女性（現職）であった。女性は知人の大学教授の教え子でもあった（ともに当選していた）。

近郊の市町村では雰囲気異なっていた。市町村庁舎や教会がある中心部エリアを歩いてみたが、ポスターと新聞の特集がある以外の選挙運動を確認できなかった。平日に訪れたこともあるかもしれないが、主要メディアが提供するポートマッチ（vaalikone）が広く普及していること、行政の役割分担が明確で党首らによるTV討論会が開催されていることも影響しているのかもしれない。

ある政党の担当者は候補者選考には苦慮した旨を新聞取材で答えている。全国（有権者数は外国人を含め453万人）で、アルエに

は定数1379名に対し1万97名が立候補（タンペレ市を含むアルエは定数79名に対し716名）している。市町村には定数8586名に対し2万9950名が立候補（タンペレ市で定数67名に対し572名）し、平均年齢51歳、女性42%、20歳代以下8%である。苦慮する点は日本とは異なっているように思う。タンペレ市では20歳代以下が95名と定数超であり、マリン前首相（34歳で就任。2012年にタンペレ市議初当選）が誕生した背景もこうしたところにあるように思う。

フィンランド議会議員との兼職も可能である。公共放送YLEによれば、議員2000名のうち地方選挙に立候補しなかった議員は26名（選挙がなかった自治領オーランド選出議員1名を含む）のみであった。174名は市町村のみに123名、アルエのみに12名、両方に39名が立候補している。選挙前には3つを兼職している議員もあり、アルエに立候補する議員は前回より半減したものの、兼職の問題が指摘されそうである。

最後に、タンペレ市は市長制を選択（多くはマネージャー制）している。直接選挙ではなく、市議選を活用して最多票獲得者が市長候補者となって準備を進め、議会が最終的に市長を選出する。LRTにラッピングされた候補者は34歳の市長候補有力者で、事実上、79歳の現職との対決であった。6月から議員の新たな任期が始まり、市長も交代する。

紙面の都合で書ききれなかった点も多々ある。今後の観察も含めて別の機会としたい。

へしかたに ゆういち・北海学園大学法学部教授V